

書名： **ゴルギアス**

著者： **プラトン**

訳者：加来彰俊

出版社：岩波書店

出版年月：1967年6月

総ページ数：326ページ

ISBN：4003360125

推薦者

綿引勝美

鳴門教育大学大学院教授

生活・健康系コース

(保健体育)

保健体育やスポーツという人間の営みについて省察した書物は数多くあるが、古典として「ゴルギアス」は必読の書である。身体や運動、そしてスポーツを指導者の視点からどのように考えたら良いのか、長い歴史をこえていきのこっている先哲の考え方に学ぶところは大きい。

「魂のための技術は、これを政治術と呼んでいるのですが、他方、身体のための技術には、そうすぐとは一つの名称を与えることはできません。けれども、身体の手話をするという点では、それは一つのものであって、そのなかには二つの部門があると言っているのです。つまり、その一つは体育術であり、もう一つは医術です。これに対して、政治術の中で、体育術に相当するものは立法術であり、また医術に相当するものは司法です。」(p.60)

身体の手話術と魂の立法術、魂の司法術と身体の手話術を、「善きもの(アレテー)」に向かう四つの術として、前者を積極的な構築の術、後者を快復の術だと、ソクラテスはゴルギアスに説明するのであるが、アレテーに向かう道程はそんなに平坦なものではないことも指摘される。

「体育術のもとには、化粧法がしのびこんでいる。その化粧法は、ずるくて、ごまかしがうまく、また生まれの卑しい、自由人らしからぬものなのだが、形や色や、肌の滑らかさや衣装でもってごまかすから、人びとにかりものの美をわがもののようにさせて、体育術によって得られる自己本来の美をないがしろにさせることになるのである。」(p.62)

最近いろいろなところでいわれている「アクティブ・ラーニング」のイニシエをたずねれば、このあたりに行き着くのであろうか？ディアレクティークの術がその背後に息づいていることに注目したいところである。

